

日本連合には知られていない脅威というのは数多い。

たとえばN2爆弾。

これはEVA世界の日本自衛隊の保有していたのが日本に現れたわけだが、欧州にも同様のものが出現しているのだ。もっとも爆弾「だけ」のため、基本的にハウスという中空に生活圏をおくエマーン圏にあるかぎりはおおむねは時間と共に朽ち果てていくだろう。

しかし、いくつかは発見され核兵器と共に保有することになる（たとえば、イハビーラ=ウィミィ軍は欧州美術品収奪の際に発見、回収している）ことは自明の理なのだが、このことはまだ日本連合政府は掴んでいない。

イハビーラが保有するDDSもそうである。とくに彼（彼女？）がこのDDS分野において大きな貢献をしたとすれば「邪教の館」と同様のシステムの構築及び使用可能の施設の保有だろう。とくに人体改造技術を用いた「悪魔=人間」合体の秘儀は最高水準にあり、イハビーラ自身、みずからを悪魔と融合する事による「更なる成長」を遂げている。

だが、もしかすればこのようなシロモノはまだ序の口である...そういうものがイハビーラ=ウィミィ軍は発見、保有しているのである。

「...ふむ...」

イハビーラはコーヒー片手にデータファイルに目を通していた。その助手として古宮陽子が不機嫌な顔で付き添っている。もっとも彼女がやっているのは打ち出されたファイルを一覧表およびグラフ化する作業ではあるが。

「...イハビーラ...これは何のデータなんだ？」

「ん？」

流石に見慣れない数字ばかりの表の打ち込みに疲れ始めた陽子はイハビーラにこれがないかを問い掛ける。

「ああ。パンドラ人形の反応データだ。」

「パンドラ人形...ああ、旧ウィミィ基地にあった人型機械のことか。」

「うむ。...BETAの照準技量を搭載できるか試してみたが...ふん。失敗だな。」

イハビーラはそういうとコーヒーを一息に飲み干して陽子の打ち込んである表の様子をみる。

「...打ち込んでくれてありがたかったがどうやら無意味に終わりそうだ。」

「もうすこし早く行ってほしいわね。」

「...C1は破棄が望ましそうだな。」

表のデータを一瞥してイハビーラは悔しそうに呟く。

「これではROEが役にたたん。もうすこし、反応速度のいい、スマートなプログラムを組まないとならん。」

「C1...ああ、OKE用のプログラム解析人形か...」

「いまのままでウィンドフルートも張子の虎だよ。BETAの照準システムを採用した
はいいが処理落ちの発生が日常茶飯事になってしまった。」

本来彼は生理学のほうで専門であって、プログラムといったのはあくまで二次的なもの
でしかない。人の脳の代用品の製作のために齧ったレベルなのだ。...まあ、二次的といっ
ても今のイハビーラを上回るプログラマーは超一流どころしかないだろうが...

「やはり、餅は餅屋...プログラマーでも誘拐したらどう？」

嫌味の意味を込めて陽子はイハビーラに声をかける。

「誘拐か...誘拐ではないが路頭に迷っている子羊を誘惑するというのが一番かもしれんな。
いかにだまらかすかが問われるが...そこは名人に任せるか。」

「...すんなり受け入れないで欲しくないわね。」

陽子の言葉にイハビーラは苦笑する。

「ははは...君の不機嫌は今に始まった事ではないからな。嫌味の要素は無視するに限る。」

陽子はさらに不機嫌さを増すのだった。

「まあ、そのへんはいいけど...」

陽子は研究室の一角に目を移す。

「なんで貴方専用のDDSが動いてるのかしら？」

「ん？」

イハビーラはそうとう無人の席にも関わらず動いているスパコンに目を移す。

「ああ、今、大量生産中でね。ちょっと今の日本連合をつついてみようかと思ったのだよ。」

「...飛び火のないように。」

「ああ、悪魔だけ簡単なROEを埋め込んで放流するだけだよ。すくなくと那古教の君ら
に飛び火することはないな。如何せん君ら以上に有能な人物がウィミイにはいないか
らね。」

イハビーラの最後の言葉は自嘲じみた響きが混じっていた。

正直な話、イハビーラは自分自身働きすぎだな、と自覚している。

いまでこそウィミイの実権のほとんどを握っているが　ウィミイ本国政府は存在して
いるし、議会も存在するがアメリカ国内にはいらなかったので裏に隠れている　有能
な人材は少ない。非常に、少ない。

「ウィンドフルートはそのままウィミイ国領土にしてしまうのも手だな...やまと事件を例
にすればいい。」

誰に聴こえる事も無くイハビーラは呟いた。

「しかし、パンドラ人形そのものは使えば最後、日本連合の最終兵器を呼んでしまう。か
とってその模造品はといえば思考システムがうまくいかない。やはり人に無い機能を認
識させるには人間の思考パターンの利用という手法では限界があるということか。」

イハビーラは監視カメラの映像のひとつに目をやる。その映像にうつっていたのは3本

の杖と... 3人の物言わず、まったく動かない人間。否、人間に見まごうばかりの人形。

「一番、美しい女性ではあるな...」

イハビーラの視線はその中の只一体に注がれる。

瞳を基準にした紋章を記した、薄い青の髪を長く伸ばした、その女性を模した人形を。

SSFW Outside Story

新世紀アリス伝 / Face Earth

Ep02. 季節はずれの恐ろしさ

B = PART

Date 02. 05/09

ゴールデンウィークが終わった東京。

ベヒモス事件の傷痕はまだ倉庫域には大きく残り、犠牲者の遺族にとっては葬式を行なっている時間。

後始末の真っ最中にその事件は起きた。

帝都区に小物ではあるが様々な魑魅魍魎が出現したのである。

その数たるや、三桁を越える。

とはいえ、そこは帝都区。人々はこういう騒動にはなれていた。いままでの降魔と違い、傷害性にとぼしいことも上げられる。

たとえば、虫の羽をはやした人形サイズのピクシ などは軽い悪戯程度のことしかしない。まあ、バスの運転手を眠らせるという軽い悪戯かといわれると厳しいが...

なかには古い家屋の掃除を手伝うという害どころか益になる小人なんかもある。

もっとも中には豚の頭を載せたふとっちょのように積極的に襲い掛かるものもいる。こういうものに対して帝都区のみなさんは共通して一つの対応をとる。

「帝国華撃団に連絡」

...かくして帝国(+巴里)華撃団は猫の手どころかネズミー匹でも欲しいぐらいの多忙を

極めるのである。

「たああ...こいつは困ったぜ...」

帝国華撃団の作戦室にて頭を抱える米田中将。

急遽、ホワイトボードには市販の帝都区の地図が貼られ、降魔（帝都区の間人は悪魔を全てそう呼んでいる）出現の報が入ると次々に磁石の駒が置かれていく。ダイヤモンドゲームに使われるコーン型のものだ。

そのピンの数。50を超える。

数が多いのも問題だが、範囲もすごい。

帝都区+秋葉原全域に渡っているのである。

「こいつを巴里華撃団の嬢ちゃんたちだけで片付けるのは酷ってもんだぜ...」

脇に控えるあやめも頷く。

かえでは新情報をもとにピンを動かしていたが、そのうち、色をいろいろと替えてゆく。

「...その色の変更はなんだ？」

「はい。寄せられてきた情報を見る限り今回の大量降魔には系統があることがわかったので系統にあわせて替えていってるところです。」

「系統？」

「ええ。イギリス=アイルランド圏...つまりケルト系...の妖精に、ギリシャ=イタリア圏の...コバルトとオークと普通呼びますが...の鬼、そして...」

かえでは一枚の写真 デジタルカメラからの撮影によるものだ を見せる。

「食人鬼系みたいですね。」

「こいつを最優先で片付けにいかんとならん。」

米田中将はその写真に写った鬼のサイズを建物から予想する。

「ちなみにこの鬼は...氷の魔法を扱うみたいですね。寄せられた連絡のなかに『ブフ』という叫びとともに氷の塊を投げつけてくるというのがありました。」

「そいつぁ、大きい情報だな。美神嬢に連絡をいれてくれ。当該する魔法体系を扱う世界がわかれば効率的な対処ができようってもんだ。」

「...それで出動はどうでしょうか？」

米田中将はううむ...と唸る。

巴里華撃団もシャノワールでの表向きの仕事がある。全員を呼べるわけでもない。それに加えて大神一郎は先のベヒモス事件で死ぬような目（いや、実際死んでいたのかもしれない）にあっていたことから検査のため出払っている。そして帝国華撃団のメンバーはまだ山ごもりの真っ最中だ。

なによりも、光武自体が分解整備中なのだ。

「巴里華撃団のほうには連絡をいれてくれ。あと、今回はあまりに数が多すぎるのと...勇敢な一般人でも対処できないレベルのようだから民間のGSに依頼ということで回してもらえるかね。」

「...よろしいので？」

「今回ばかりは仕方あるまい。上への連絡は俺からいれるよ。」

「わかりました。」

かえでは一礼すると作戦室から退室した。

「しかし...今回の件、妙な話だな。」

「...そうですね。いままでの降魔とはあきらかに違います。これはどちらかといえば、私たちの世界のものによる混乱ではないと言っていいでしょう。」

「あやめ君もそう思うかね。...降魔以外の潜伏していた魔が動き始めたという事が...厄介な話だぜ。」

「しかし...ひどい校外学習になったもんだな...おい。」

藤田浩之はその騒ぎを見て疲れた声を発す。

「みてみて～ひろゆきちゃ～ん。」

そのとなりで神岸あかりは...妖精ピクシ をそのてに抱いてかいぐりかいぐりしていた。

「...あかり...お前な...猫じゃないんだぞ。」

「いいんじゃない、浩之。」

「...雅史...お前、本当にそう思うのか？」

「じゃあ、浩之はああいうのと近づきになりたい？」

「...いや。」

二人の少年の見る先では...長岡志保が雪だるまとカボチャ頭にマント相手にいろいろと無駄知識および志保ちゃん情報を教えていた。

そのとなりでは犬頭達を従え、人に襲い掛かる豚頭をハンティングにいつてるアメリカ人がいる。

「...観念しようよ。浩之。」

「...だな。」

浩之はそうつぶやくと側をひらひらと飛んでいたピクシ に顔を向けた。

「なに？」

「んー、なにやってるのかなと。」

「いたずらよ。」

「ほお...俺も混ぜてくれないかな。あれに悪戯したい。」

浩之は子猫を抱きしめてるがごとくピクシ を可愛がるあかりを指差したのだった。

一部を除けば悪魔達と意外と仲良しになっている人間は多い。

というか、たくましい。

帝都区、帝劇の屋根の上。

イハビーラはそこで外の様子を眺めていた。

「...なんというか...アメリカ人とは反応が全く違うな。」

ウィンドフルートにやってきた艦隊の兵士たちの反応を思い返す。

今回解き放ったのは数を優先したのと、あくまで悪魔を強制力なしで解き放った場合 & 日本連合及び今の日本に住む人間の悪魔に対する反応を見ることにしたため R O E の強制もなし、悪魔個体個体の反応に任せるといふ放任 本当に放流 で行なった。

その結果は元々人間に対し積極的中立もしくは友好的な位置にいる妖精たちは次々と一部の人間たちと意気投合。一緒になって暴れ回る（当然人間の常識の域内での悪戯三昧）か仲良しこよしになってついていくという状況。

人間に対し敵対的な態度を取りやすいオークやコボルトはなんというか手馴れた帝都区の住人たちに逆に翻弄される始末。

結局のところ、本当に破壊行動を行なっているのはオーガとウェンディゴ、各5体ずつと個々のオークが寄り集まった集団が一つという状況。

実はイハビーラはDDSを手に入れた初期にアメリカ国内で同じことをやってみただが、そのときは相手がなんであろうと発砲、あっさりと退治されたのを眺めていた。

「銃社会でないうえに、無宗教 宗教のお祭り気分にならなんでもOKな風土だけのことはある。今回は人物観察にとどめるか。これはこれで興味深い。」

独り言を呟いている、ぱっとみいは非常に美しい妖精。

でも、帝劇の真上....

米田中将にその報告はすぐに届けられた。

「はあ！？、うちの真上にあきらかに毛色の違うのがいるだって？」

かえでからの報告に流石に目を丸くする米田中将。

「さきほど、デジカメの映像込みで回って来ました。」

かえでからその映像記録を渡される。それをノートパソコンで再生した。

「...うひょう...こいつはなかなかの上玉...」

米田中将がそう口をついた瞬間、藤枝姉妹の二人からスリッパで殴られる。

「...もとい。たしかにいままでの報告にあったのと違うな。」

「ですが...流石に場所が拙いですね」

かえでの口調には悔しいものがある。

理由は極めて簡単である。

ここに（今現在）光武は上れない。

ついでをいえば、ここでのチャンバラは施設上避けたい。

まあ、のぼれたからといっても最高レベルのチューンナップ及びスキル継承を施したイハビーラの身体に傷を与えられるかと問われれば、NOであるのだが。

「あやめくん...これがなにか予想がつくかな？」

米田中将はノートパソコンをあやめが見えやすい向きに変える。

「...映像だけではなんとも...。サタンも全く違った姿をしていましたし。」

「姿を変えていないと過程したならば？」

「外見から考えれば...妖精系でしょう。そこから女性で気品のあるものを限定すれば、数は多少絞れますが...」

「第一候補は？」

「ティターニア。今現在のティル=ナ=ノグの女王。」

「真夏の世の夢か...」

「もっとも、このティターニア...本物のティターニアでは無いと思われます。」

米田中将は思われます、という言葉のわりに断定的な口調のあやめに顔を向ける。

「...理由は？」

「簡単です。こちらに来る前に妖精界のトップは不介入を決めていました。まあ、陽気、お祭り好きが身上の彼らがどこまで遵守するかは疑問ですけど。」

「...わかりやすい理由でどうもありがとうな。って、ことはこいつは...ティターニアの皮を被った...犯人ってことになるな。」

「第一候補でしかないですよ？」

「じゃあ、第二候補は？」

「ブリジット...いや、ナジャかもしれませぬね。」

「どのみち第二候補以下でも同じこった。妖精系であるという段階でそういうことになる。かえでくん。これを今から呼称、ティターニアで統一する。このティターニアの動向をチェックしておいてくれたまえ。...まあ9割方黒幕だろうが、まったく無関係という可能性も僅かだかのこつとるからな。」

再び、イハビーラ。

「...ん？」

どうも纏わりつくような視線を感じるイハビーラ。周囲をみると帝都区市民がときどきこっちを見ていることに気付く。

「面倒なことだな...。」

イハビーラはひとつ手を振って数匹の小鬼を呼び出す。

「グレムリンども...私を狙っている映像機材を麻痺させる。」

子鬼はクケーと一声鳴くとキョロキョロと視線を移す。そして、カメラと視線があうと再びクケーと鳴く。一方でイハビーラは呼び出した小鬼数匹を身に抱きしめさせたまま自前の羽根でもって空を飛んでいく。

「もう少し観察したかったが...あとは月瀬に任せるか。」

人目の少ない路地裏から羽根を納め（イハビーラにとっては意外に痛みが走る）、目立つ金の髪を隠すように鬘を被って簡単なコートを来込んで用意していた自動車に乗り込む。

否、乗り込もうとした。

視界に僅かに映ったウェンディゴ。

それに黒い霧が纏わりつくのをイハビーラは見てしまったのだった。

5月8日。この日の東京都の天気は記録ではこう残っている。

晴れ時々...雪。